

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二·一第 卷八十五第

高田博士還曆記念論文集

行發月二年九十和昭

高田保馬博士年譜

明治十六年 十二月二十七日、佐賀縣小城郡三日月村遠江、高田清人の三男として生る。母くす。兄一人、

姉三人。次兄天。父五十歳、母四十三歳。

明治二十二年 四月、三日月村晚成小學校入學。

明治三十年 三月、晚成小學校卒業、四月、佐賀縣立佐賀中學校入學。同期生に吉田善吾、武富敏彦等の諸氏あり。

明治三十五年 三月、同中學校卒業。在學中校友會雜誌築城の編輯に参加す。貧富の問題に關する論文を發表す。偶然の機會に經濟學教科書を読み、マルサス人口論の記述に興味を覺ゆ。九月、熊本第五高等學校第三部に入學す。

明治三十六年 三月、退學、第三部の科目に興味を失ひし故なり。九月、第五高等學校第一部入學。同期生に瀧正雄、下村虎六郎(湖人)等の諸氏あり。

明治三十七年 四月、校友會機關龍南會雜誌の編輯に

參加す。論文「社會主義と詩人」は全國の高等學校雜誌に於てはじめて社會主義を論じたるものなり。

九月、特待生を命ぜらる。

明治三十八年 九月、特待生を命ぜらる。十二月より病氣休學。鹿兒島に轉地す。瀧正雄氏春まで同地滞在。

明治三十九年 四月、歸郷靜養。九月、復校。栗野氏轉校事件に關して起つ。事件展開して學校教務當局に對する運動となるに及び、此運動に抗争す。

明治四十年 七月、第五高等學校第一部文科卒業。同期生に重光葵、大川周明等の諸氏あり。九月、京都帝國大學文科大學哲學科入學、社會學を專攻す。課外、毎週一回、米田博士の私邸に於てギディングス社會學原理を讀む。

明治四十一年 七月、特待生を命ぜらる。タルド社會法則論講讀。

明治四十二年 七月、特待生を命ぜらる。グロツパリ社會學綱要講讀。

明治四十三年 四月、卒業論文、分業論提出。七月卒業、大學院入學。米田庄太郎博士指導の下に社會學を專攻す。十月、新詩社に入る。

明治四十四年 七月、研究報告、社會結合論提出、與謝野寛氏渡歐後作歌を怠る。

明治四十五年(大正元年) 七月、研究報告、社會階級論提出。八月、分業論執筆。後、京都法學會研究叢書の一冊として公刊。十二月、資本蓄積論の研究執筆。これマルクス主義に關する最初の論文なり。此年よりカアネギイ平和財團の補助により日本徴兵制度の經濟的影響の研究に従事す。小川郷太郎博士の指導を受く。春、田中大溝町稻葉氏に寄寓す。

大正二年 七月、師團所在都市の調査の爲に九州、四國、北海道に旅行す。

大正三年 九月、京都帝國大學法科大學講師、佛蘭西經濟書講讀。春、下鴨東林(今の泉川町)瀧正雄氏方寄寓。二戸を隔てて學生近衛公爵假寓に隣す。秋、糺森、二葉庵に移り獨居す。

高田保馬博士年譜

大正四年 二月二十六日、佐賀縣神崎町大石太郎三女きぬと結婚。秋、下鴨蓼倉に新居。

大正五年 秋、下鴨警察署前に轉居す。此年より社會學原理の執筆に終始す。

大正六年 十一月、下鴨松木町に轉居、間もなく赤痢を病み、府立病院に於て靜養す。約一ヶ月。爾後數年屢々胃腸を損ふ。

大正七年 春、膝關節打撲の爲仰臥二ヶ月。夏、四日市在住の兄清俊を失ふ。秋、田中大溝に轉居す。

大正八年 二月、社會學原理公刊。夫妻共に流感に罹る。六月、廣島高師教授、社會學經濟學擔任。千田町九丁目假寓。

大正九年 春、新川端町轉居、十月、長女秋子生る。當時の講義案は後社會學概論として刊行。秋、胃を病む。

大正十年 二月、久留米行徳胃腸病院に入る。在院約一ヶ月。六月、東京商大教授。社會學經濟學史擔任。九月、東大久保に假寓。十二月、文學博士。

三六三

大正十一年 三月、東京中野に轉居。當時經濟學史としてクラアク、シユムベエタアを講ず。剩餘價值について河上肇博士の所説を批評す(雜誌、解放)。同博士及び其他のマルクス主義者との論争は爾後約十年に亙る。四月、九州帝國大學附屬醫院に於て試験開腹、手術すべき疾患なし。

大正十二年 胃疾癒えず、治を南病院に請ふ。七月、滿鐵の招に應じて滿洲に講演。九月、震災に遭ふ。胃疾悪化す。慢性胃潰瘍、十一月より病臥、流動食をとる。

大正十三年 二月、東京商大を辭して歸郷靜養す。四月、長男保美出生、生後一ヶ月に満たずして夭逝。五月、九州帝國大學附屬醫院内科入院。在院一ヶ月。九月、小濱温泉滞在、健康漸く恢復す。

大正十四年 五月、九州帝國大學教授法文學部勤務、社會學を講義す。十月、次女さえ子出生。當時郷里三日月村より通勤。テンニイス、フィアカント、ヴイイゼ、マクス・セエラア、ガイガア等獨逸社會學

者と文通して意見を交ふることも多し。

大正十五年 四月より經濟原論を講義す。八月、宇和島に旅行して胃を損ふ。十月より半年間休講。

昭和二年 四月より經濟原論續講、九月までに第一回の講義を終る。講義用プリントは豫定に反して一千頁をこゆ。後これを改稿したるもの即ち經濟學新講五卷なり。

昭和三年 二月、三女ちづ子生る。六月、宮崎鶴戸に遊び、八月、川内に講演す。

昭和四年 四月、京都帝國大學教授兼任。經濟原論擔任。東三本木信樂寄寓。七月、次女さえ子を失ふ。當分十月より半年歸郷して九大に講義す。

昭和五年 十一月、京都帝國大學教授兼九州帝國大學教授。經濟學新講價格の理論脱稿。

昭和六年 マルクス主義批判の講演旅行は此年より昭和七年に及ぶ。淨土寺馬場町寓居。高等試験臨時委員、昭和十八年まで連年。

昭和七年 寓居は鹿ヶ谷より東三本木に復す。利子論

研究をはじめ、夏、仙臺旅行。

昭和八年 四月、郷里にて流感にかゝる。大宮泉堂町武富方寄寓。秋、宮崎、熊本へ。日本學術振興會常置委員、二年にして退く。後常置委員、小委員會委員等として参加をつゞく。

昭和九年 四月、下鴨芝本町松尾方寄寓。十二月、兼官を免ぜらる。春、雲仙、長崎に遊び、八月、家族と共に小濱温泉に滞在す。貧者必勝の批評に答ふ。

昭和十年 夏、家族と共に唐津に滞在す。民族の問題を論じはじめ。依然利子論に専念す。

昭和十一年 四月、家族郷里より上京。五月、塔ノ段敷下町に住居。七月、胃疾を以て京都帝國大學附屬醫院松尾内科入院、磯部外科に轉じて手術を受く。

八月上旬退院。十月、三朝温泉に静養す。九月、商工省統制委員會委員。

昭和十二年 四月、三朝温泉に於て、利子論脱稿。年末、新京に赴く。

昭和十三年 二月、經濟學部長。七月、高等試驗經濟

學擔任。經濟學概論脱稿。

昭和十四年 二月、經濟學部長を免ぜらる。四月、オツペンハイマア教授入浴。八月、雲仙に於て新利子論序説を認む。九月、東大經濟學部に於て勢力説の概要を講演す。

昭和十五年 一月、日本諸學振興會常任委員。勢力論を執筆す。七月、同會公開講演。秋、長崎に赴き、冬、鹿兒島に旅す。十二月、胃疾の爲に京都帝國大學附屬醫院菊池内科入院。一ヶ月にして退院。

昭和十六年 二月、日本出版文化協會理事。春、病後小閑を得て第二經濟學概論脱稿。晩秋、栃木長野に旅す。

昭和十七年 一月より二月に亙り新利子論起稿。二月下旬中絶。夏、ランゲ、ヒックスの利子説を考察す。

七月、高松高商講義。

昭和十八年 一月、民族研究所長兼任。二月上旬、東北帝國大學法文學部に民族論を講義す。夏より秋にかけて統制經濟論執筆、改稿は十月末完成。十二月二十六日退官を願出づ。

高田保馬博士著書論文目録

著書之部

書名

發行所 刊年

グロツバリ社會學綱要(譯)

有斐閣 大ニ

分業論

有斐閣 大ニ

同改訂版

刀江書院 大五

大數法論

有斐閣 大四

(Conscription System in Japan (revised by Prof. Gataro Ogawa))

Oxford University Press, New York.

社會學的研究

寶文館 大七

同改訂版

寶文館 大三

社會學原理

岩波書店 大八

現代社會の諸研究

岩波書店 大九

社會と國家

岩波書店 大ニ

社會學概論

岩波書店 大ニ

階級考

衆英閣 大ニ

同改訂版

衆英閣 大四

經濟學研究

岩波書店 大三

階級及第三史觀

改造社 大四

社會學大意(社會政策大系第一卷)

大東出版社 昭元

社會關係の研究
人口と貧乏

岩波書店 昭元

經濟學(社會科學叢書第八編)

日本評論社 昭二

景氣變動論(現代經濟學全集第十三卷)

日本評論社 昭三

價格と獨占

千倉書房 昭四

社會雜誌

日本評論社 昭四

經濟學新講 第一卷 總説、生産の理論

岩波書店 昭四

同 第二卷 價格の理論

岩波書店 昭五

同 第三卷 貨幣の理論

岩波書店 昭五

同 第四卷 分配の理論

岩波書店 昭六

同 第五卷 變動の理論

岩波書店 昭七

勞働價值説の吟味(理論經濟學叢書第一篇)

日本評論社 昭六

歌集ふるさと

日本評論社 昭六

經濟學方法論(改造社版經濟學全集第五卷)

改造社 昭七

マルキシズムの經濟學的批判

青年教育普及會 昭七

經濟學の近狀と世界經濟の動き

青年教育普及會 昭七

經濟學原論(理論經濟學叢書第三篇)

日本評論社 昭八

貧者必勝

千倉書房 昭九

同改訂版

千倉書房 昭五

國家と階級
マルクス經濟學論評
民族の問題
我が國の農村問題
米價の長期變動
利子論研究
經濟と勢力(理論經濟學叢書第四篇)
利子論
經濟學概論(理論經濟學叢書第八篇)
回想記
東亞民族論
民族と經濟
勢力論(新經濟學全集)
新利子論研究
第二經濟學概論(理論經濟學叢書第十五篇)

岩波書店 昭九
改造社 昭九
日本評論社 昭〇
青年教育普及會 昭〇
日本學術振興會 昭〇
岩波書店 昭二
日本評論社 昭二
岩波書店 昭三
日本評論社 昭三
改造社 昭三
岩波書店 昭四
有斐閣 昭五
日本評論社 昭五
岩波書店 昭五

文藝春秋社 昭六
岩波書店 昭六
日本評論社 昭六
甲鳥書林 昭七
甲鳥書林 昭七
有斐閣 昭八

民 族 論 記
勢力説論集(理論經濟學叢書第十六篇)
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

民 族 論
民 族 耐 乏
洛 北 集
民族と經濟 第二集

論文之部

論 題 掲載雜誌 卷號

明治四十三年 家族の崩壊が社會團體に及ぶ結果(社會學的研究九) 藝 文 一ノ八

明治四十四年 社會的法則に就きて(階級考改訂版一七) 藝 文 二ノ一

社會科學の研究 藝 文 二ノ五

文明の迷妄(社會學的研究一二) 藝 文 二ノ七

大正元年 資本家的集積説の研究(社會學的研究一〇) 京都法學會雜誌 七ノ三

社會法則の特質を論ず 國民經濟雜誌 二ノ四

レオン・ワラノ及びピロザンヌ學派(譯) 國民經濟雜誌 二ノ五

社會進化論の性質(社會學的研究一) 哲 學 雜 誌 三〇七

職業の尊卑を論ず(階級考四) 藝 文 三三ノ五

フイエエ逝く 藝 文 三三ノ六

遊戯としての社會生活(現代社會の諸研究四) 藝 文 三三ノ八

大正二年 左右田學士の「經濟法則の論理的性質」を讀む 京都法學會雜誌 八ノ一

觀念力の社會學 京都法學會雜誌 八ノ七

ロリアの「進化論の進化」 京都法學會雜誌 八ノ八

ユウゼニツクス批判 京都法學會雜誌 八ノ八

ユウゼニツクス批判 三六七

ユウゼニツクス批判 三六七

原始亂婚に就いて 基礎社會の發達に就いて(社會學原理 Ⅱ 一〇三)	經濟論叢 四ノ一
社會學と社會科學(社會學原理 Ⅰ、Ⅱ) 社會の全體と部分(社會學原理 Ⅱ、五、六) 社會的錯綜について(社會學原理 Ⅱ、一 一〇二)	經濟論叢 五ノ一 哲學研究 六ノ三 藝文 八ノ七
大正七年 物價と割引歩合との平行(經濟學研究 一 六)	經濟論叢 六ノ四
分業を論じて福田博士の教を乞ふ(社會 學的研究 八)	經濟論叢 七ノ六
飯島學士譯經濟學原論を讀む 所得のバレット線に就いて(現代社會の 諸研究 五)	經濟論叢 七ノ二 經濟論叢 七ノ六
戰爭と文化(講演)	日本社會學院年報 六ノ三
大正八年 戰爭と文化(現代社會の諸研究 七) 爲替價值に關するカツセル說に就いて (經濟學研究 一四)	經濟論叢 八ノ二
收益の丘を論ず(現代社會の諸研究 六)	經濟論叢 八ノ三
紙幣の減價に就いて(經濟學研究 一三)	經濟論叢 八ノ六
最近の出生率減少について(現代社會の 諸研究 一〇)	經濟論叢 九ノ一
「社會學的研究」の批判に答ふ 集産主義の社會學的考察(現代社會ノ諸 研究 二)	國民經濟雜誌 二六ノ四 國民經濟雜誌 二六ノ五
將來社會の種々(現代社會の諸研究 一)	哲學研究 三
拙著「社會學原理」の批評に答ふ	哲學研究 三

高田保馬博士著論論文目錄

「ギルドンシアリズム」の社會學的考察 (現代社會の諸研究 三)	政治經濟論叢 一ノ二
私の觀た人種問題(現代社會の諸研究 八)	大阪毎日新聞 七月
社會問題の中核(階級考 一〇)	學校教育 三
大正九年 社會の存続(社會學概論 Ⅱ、七)	經濟論叢 二〇ノ三
基礎社會の發達方向(社會學概論 Ⅱ、四)	經濟論叢 二二ノ三
結合に關する一般的法則(社會學概論 Ⅱ 一)	國民經濟雜誌 二八ノ五
諸種の社會の相互關係(社會學概論 Ⅱ、 三)	哲學研究 三
社會組織に就いて	學校教育 五
分離の一般的性質(社會學概論 Ⅱ、二)	商業及經濟研究 六
コオルの産業自治論	我等 二ノ一
改造の矛盾(階級考 九)	大阪朝日新聞 一月
社會連帶に就いて(階級考 一一)	大阪毎日新聞 一月
大正十年 結合と分離との關係(社會關係の研究 八)	學校教育 三
大正十一年 社會の團結の減衰(社會と國家 一一)	經濟論叢 二四ノ一
階級について(階級及第三史觀 三)	經濟論叢 二五ノ三 國民經濟雜誌 二六ノ三 國民經濟雜誌 二六ノ四 國民經濟雜誌 二六ノ五
經濟靜學觀(經濟學研究 一)	國民經濟雜誌 三三ノ三 國民經濟雜誌 三三ノ四 國民經濟雜誌 三三ノ五
社會に於ける國家の地位(社會と國家 五 三)	國家學會雜誌 三六ノ三

文化生産者としての社會(社會學概論 IV 一—二)	國家と社會との關係	社會の地域的解放(社會と國家 八)	社會の分化に就いて(社會と國家 六)	社會法則論の一節(社會學概論 I、三)	自由に關する一考察	河上博士の剩餘價格論(經濟學研究 八)	報酬遞減の法則に就いて(經濟學研究 四)	マルクスの階級概念(階級及第三史觀 二)	クラークの資本觀(經濟學研究 三)	利子の構成(經濟學研究 七)	第三史觀(階級及第三史觀 五)	獨占について	生計費に就いて(人口と貧乏 二)	階級の本質(階級及第三史觀 一)	利子の嚴密動學說(經濟學研究 II、六)	剩餘價格に對して再び教を河上博士に請ふ(經濟學研究 九)	大正十三年	階級の動學的考察(階級及第三史觀 六)	獨占の本質(價格と獨占 一)	社會の本質に關して(社會關係の研究 二)	社會の本質に就いて(社會關係の研究 一)
商學研究 一〇三	日本法政新誌 一九〇一	哲學研究 七	思想 四	思想 七	改造 四〇二	解放 五〇二	商學研究 二〇三	經濟論叢 一六〇一	國民經濟雜誌 三〇一	商學研究 三〇二	思想 二九	表 三〇七	文化生活 十月號	改造 五〇一	改造 五〇九	解放 五〇七	經濟論叢 二六〇四	經濟論叢 二九〇四	社會學雜誌 五	社會學雜誌 三	

剩餘價格第三論(價格と獨占 二)	經濟史觀より第三史觀まで(階級及第三史觀 四)	大正十四年	經濟形態に就いて(價格と獨占 三)	結合の上位(社會關係の研究 四)	Gemeinschaft に就いて	定刑としての共同社會(社會關係の研究 五)	社會學の對象について	「結合の上位」の批判に答ふ	社會科學に就いて	國家の永續性(國家と階級 二)	昭和元年	效用、價值及び價格	生産の概念	價格の理論	經濟とは何ぞや(價格と獨占 四)	社會關係の平行について	社會的基本關係について	社會學論の一節	階級の自壞作用(社會關係の研究 七)	昭和二年	分配論の性質(經濟學新講 V、一)	利子の泉源について(經濟學新講 VI、四 1—2)
改造 六〇三	現代思潮大觀(同文館發行)	經濟研究 二〇二	社會科學 一〇一	社會科學 一〇三	社會科學 一〇五	社會學研究 一〇二	社會學雜誌 一〇六	社會學雜誌 一〇八	社會學雜誌 一〇九	經濟論叢 二二〇一	經濟論叢 二二〇二	經濟論叢 二二〇五	經濟研究 三〇二	社會學雜誌 三〇三	社會政策時報 三〇六	精神科學 一〇二	改造 八〇四	經濟論叢 二四〇五	經濟論叢 二五〇五			

歸屬學説について(價格と獨占五) 思想 九

共同社會の優越に就いて 社會科學研究 一〇一

經濟學論の一節(經濟學新講 Ⅱ、二二一) 社會科學研究 一〇一

4) 限界效用説の再吟味 社會科學研究 一〇二

地代の理論 社會科學研究 一〇三

人口問題の反批判(人口と貧乏七) 改 九〇九

人口問題私見(人口と貧乏五) 福岡日日新聞八月上旬

昭和三年 經濟論叢 三三〇

利潤成立の機構(經濟學新講 Ⅱ、四二一) 經濟論叢 三三〇

3) 經濟靜態について(景氣變動論二) 經濟論叢 三三〇

生産係數について(價格と獨占六) 經濟研究 三三〇

經濟動態理論―その總説(景氣變動論一) 社會科學研究 二〇二

資本主義の社會學的考察(國家と階級五) 社會經濟體系 第六卷

社會學に於ける平等思想(國家と階級三) 岩波講座「世界思潮」

私の人口理論(價格と獨占七) 經濟往來 九月號

昭和四年 經濟論叢 三三〇

價格の勢力説(經濟學新講 Ⅱ、附録二) 經濟論叢 三三〇

勞働の理論(經濟學新講 Ⅱ、二一五) 經濟論叢 三三〇

免償價值について 經濟論叢 三三〇

平均生産力説について(經濟學新講 Ⅱ、四) 經濟論叢 三三〇

資本蓄積に關する第二論(價格と獨占八) 改 二〇一

合理化的の行方 經濟往來 四〇六

高田保馬博士著書論文目錄

昭和五年 マルクス價值論の價值論(勞働價值説の吟味三) 經濟論叢 三〇一

國際價格の理論(經濟學新講 Ⅱ、七) 經濟論叢 三〇一

貨幣數量説について(經濟學新講 Ⅱ、七) 經濟論叢 三〇一

購買力平價説の一考察(經濟學新講 Ⅱ、八) 經濟論叢 三〇一

貨幣の本質について(經濟學新講 Ⅱ、一) 經濟論叢 三〇二

1) 貨幣の中心機能(經濟學新講 Ⅱ、二) 經濟論叢 三〇三

3) 勢力と經濟―勢力説に對する批判―(勞働力説論叢七) 經濟論叢 三〇五

利子に於ける勢力の作用 經濟論叢 三〇六

食糧問題の社會性 經濟史研究 七

第二史觀の立場から―福本氏への反批判―(國家と階級七) 思想 三〇二

勞働の異質性(勞働價值説の吟味一) 亂國 三〇二

勞働價值説は支持し得らるるや(勞働價值説の吟味二) 改 三〇八

權力と經濟―河上博士に答ふ―(國家と階級八) 中央公論 三〇九

資本蓄積理論の蓄積(勞働價值説の吟味四) 中央公論 三〇九

勞働價值説の擁護難(マルクス經濟學論評五) 中央公論 三〇三

獨占をめぐりて 經濟往來 五〇六

昭和六年 階級による差別出生率 經濟論叢 三〇一

利子の形成について(經濟學新講 Ⅱ、四) 經濟論叢 三〇三

三七一

經濟理論に於ける時間(經濟學新講 V、 一、二、補論)	經濟論叢 三ノ六
效用經濟と勢力經濟(經濟學新講 V、二 三)	經濟論叢 三ノ一
經濟的變動の分析(經濟學新講 V、一、三) 長期波動について(經濟學新講 V、四、 補論)	經濟論叢 三ノ二
マルクス地代論の解釋(マルクス經濟學 論評九)	經濟論叢 三ノ四
景氣徵候論について(經濟學新講 V、五 一、二)	經濟論叢 三ノ五
景氣變動と前進變動(經濟學新講 V、七)	經濟論叢 三ノ六
勞銀の勢力説(經濟學新講 V、二、二)	經濟學研究 第一輯
マルクスの地代論と價值論(マルクス經 濟學論評六)	造 三ノ四
マルクス地代論をめぐりて(マルクス經 濟學論評七)	造 三ノ六
マルクスを破壞する者(マルクス經濟學 論評八)	造 三ノ七
地代論争の決算(マルクス經濟學論評 一 〇)	造 三ノ三
社會學的史觀について(國家と階級六)	朝永博士還曆記念哲學論文 集
情死の新研究	中央公論 六ノ一
經營經濟學についての私見	經營と經濟 一ノ五
職業を中心とする見方	季刊社會學 一
昭和七年	
景氣に於ける勢力の作用(經濟學新講 V 六一、二)	經濟論叢 三ノ一
蓄積理論の一考察(マルクス經濟學論評 一一)	經濟論叢 三ノ二

貨幣の價値の受動性(利子論研究 II、六)	經濟論叢 四ノ五
利子に關する試論(利子論研究 I、一)	經濟論叢 四ノ六
經濟に於ける勢力(利子論研究 I、二)	經濟論叢 三ノ二
時差說覺悟(利子論研究 II、九)	經濟論叢 三ノ三
利子歩合の理論(利子論研究 II、一〇)	經濟論叢 三ノ四
貨幣の價値に就いて(利子論研究、附論)	經濟論叢 三ノ五
制欲説の吟味(利子論研究 II、三)	經濟論叢 三ノ六
前進變動の理論	經濟學研究 二ノ一
景氣變動の波長について	經營と經濟 二ノ一
景氣波長の問題	經營と經濟 二ノ六
國家と社會(國家と階級 一)	岩波講座「哲學」
日本經濟の前途	經濟往來 七ノ六
増税と資本蓄積	經濟往來 七ノ三
昭和八年	
人口に關する小論(マルクス經濟學論評 四)	經濟論叢 三ノ一
蓄積理論の修正—説いて久留間氏の批評 に及ぶ—(マルクス經濟學論評 一一)	經濟論叢 三ノ二
純生産力について(經濟と勢力九)	經濟論叢 三ノ三
マルクスに於ける平均利潤率(マルクス 經濟學論評 一五)	經濟論叢 三ノ四
生産力の自己運動(國家と階級九)	經濟論叢 三ノ五
唯物史觀の第三史觀への接近(國家と階 級 一〇)	經濟論叢 三ノ六
資本形成の自働性について(利子論研究 II、四)	經濟論叢 三ノ一
利子の資本蓄積に及ぼす作用(利子論研 究 II、五)	經濟論叢 三ノ二

勢働の供給について(利子論研究Ⅰ、Ⅱ)	經濟論叢	三〇ノ三
貨幣效用の測定について(利子論研究Ⅲ)	經濟論叢	三七ノ四
勞銀と利子(利子論研究Ⅳ、Ⅴ)	經濟論叢	三七ノ五
資本蓄積論について	社會政策時報	一五〇
日本に於ける社會學の發達	岩波講座「教育科學」	第二六冊
蓄積過剰の必然性(マルクス經濟學論評一四)	改	二五ノ八
國民貸付論(貧者必勝一)	經濟往來	八〇ノ三
蓄積理論の書き改め(マルクス經濟學論評一二)	福田博士追憶記念論文集經濟學研究	
日本の歩み(貧者必勝第三輯)	福岡日日新聞	一月
昭和九年		
植民の世界史的意義(貧者必勝一三)	經濟論叢	二九ノ一
ベムムの利子生産力説(利子論研究Ⅱ、一三)	經濟論叢	二九ノ四
節約の矛盾について(利子論研究Ⅳ、一六)	經濟論叢	二九ノ五
新勞銀基金説について(利子論研究Ⅳ、一四)	經濟論叢	二九ノ六
生産力の問題(國家と階級一)	經濟論叢	二九ノ一
供給曲線の性質(經濟と勢力七)	經濟論叢	二九ノ二
貨幣の將來效用について(經濟と勢力六)	經濟論叢	二九ノ三
不完全競争について(經濟と勢力八)	經濟論叢	二九ノ四
經濟理論に於ける勢力の地位(經濟と勢力二)	經濟論叢	二九ノ五
社會的勢力の分析(經濟と勢力三)	經濟論叢	二九ノ六
ハイエクの景氣理論(利子論研究一五)	經濟學論集	四〇ノ五

高田保馬博士著書論文目錄

勢力なくして利子なしと云ふ理論(利子論研究一)	九大經濟學研究	四〇ノ一
經濟社會學の素描(國家と階級四)	經濟史研究	二〇ノ一
都市問題に關する社會學的一考察	都市問題	一九ノ五
國民生活に於ける米の地位	經濟往來	九〇ノ六
マルサスと近代景氣論(經濟と勢力五)	經濟往來	九〇ノ二
世界主義と民族主義(民族の問題一)	經濟往來	九〇ノ三
昭和十年		
勢力關係の性質(經濟と勢力三)	經濟論叢	四〇ノ一
増税は景氣の芽を摘むか	經濟論叢	四〇ノ二
利子論序説(利子論一)	經濟論叢	四〇ノ四
利子の社會的説明(利子論二)	經濟論叢	四〇ノ五
民族と社會の發達(民族の問題九)	經濟論叢	四〇ノ六
民族の周流(民族の問題九)	經濟論叢	四〇ノ一
生産の構造(利子論四)	經濟論叢	四〇ノ二
利子の限界生産力説(利子論五)	經濟論叢	四〇ノ三
限界生産力説の二形態(利子論七)	經濟論叢	四〇ノ四
利子生産力説について(利子論六)	經濟論叢	四〇ノ五
消費利子の問題(利子論三)	經濟論叢	四〇ノ六
經濟學の根本問題(經濟と勢力一)	理想	四〇ノ六
民族主義の進行	經濟往來	一〇〇ノ四
ニチオビヤ、イタリヤ、民族主義(民族の問題八)	經濟往來	一〇〇ノ九
危機的正體(經濟的不況の派生物)(民族の問題五)	中央公論	三〇ノ一
民族と國家(民族の問題六)	中央公論	三〇ノ七

勞働價值説の評價(經濟と勢力四)

思想 國防 三月號

景氣に就いて

大阪銀行通信録 四三

人口政策の缺亡(民族と經濟四)

エコノミスト 三〇六

金價値の將來

エコノミスト 三〇九

軍備と經濟

エコノミスト 三〇三

「極東經濟」誕生の必然性

エコノミスト 三〇七

農村觀の二途(民族と經濟一)

農業と經濟 二〇七

昭和十一年

費用としての勢力(利子論九四〇—四)

經濟論叢 三〇一

純限界生産力説(利子論八)

經濟論叢 三〇二

勞銀理論の破綻(利子論九四五—四九)

經濟論叢 三〇三

ナイトの利子理論(利子論一四九〇—一〇三)

經濟論叢 三〇四

ナイト利子論の吟味(利子論一四一〇四—一〇六)

經濟論叢 三〇五

フィシヤア利子論の分析

經濟論叢 三〇六

フィシヤア利子説の難點(利子論一四九二—九五)

經濟論叢 三〇一

利子歩合の決定(利子論一〇五五—五九)

經濟論叢 三〇二

生産期間について(利子論一〇六四—六七)

經濟論叢 三〇三

日本精神の一面—貧者必勝の補註(民族と經濟一七)

福岡日日新聞 一月

昭和十二年

固定資本論の一節(利子論一二七五—七)

經濟論叢 四〇一

固定資本の性質(利子論一二七〇—七三)

經濟論叢 四〇二

自然利子論(利子論一三二九—三二)

經濟論叢 四〇五

現實利子論の問題(利子論一三三五—三八)

經濟論叢 四〇六

入口政策に就いて(民族と經濟三)

經濟論叢 四〇一

ケインズの利子理論(新利子論研究一)

經濟論叢 四〇三

貨幣本質に關する若干の問題(新利子論研究一四)

經濟論叢 四〇四

失業と勞銀(新利子論研究六)

經濟論叢 四〇五

資本主義の純粹理論(東亞民族論一)

經濟論叢 四〇六

經濟と勢力(勢力説論叢六)

日本評論 三〇二

選舉法改正に望む

日本評論 三〇七

軍備と生産力(民族と經濟一三)

財政 三〇四

農業政策の前提(民族と經濟二)

農業と經濟 四〇四

軍備擴張の程度(民族と經濟一二)

福岡日日新聞 一月

昭和十三年

資本主義と戦争(東亞民族論一一)

經濟論叢 四〇一

貨幣の本質について(新利子論研究一五)

經濟論叢 四〇四

貨幣と利子(新利子論研究一六)

經濟論叢 四〇五

消費節約の問題(民族と經濟五)

經濟論叢 四〇六

貨幣は被覆なりや(新利子論研究九)

經濟論叢 四〇二

利子論の新舊(新利子論研究二)

經濟論叢 四〇三

勢力説に於ける存在拘束性(勢力説論叢五)

經濟論叢 四〇五

投資節約の均等について(新利子論研究三)

經濟論叢 四〇六

貧乏日本の爲に(東亞民族論四)

改造 四〇七

東亞民族主義論(東亞民族論三)

日本評論 三〇八

物價騰貴と國民生活

エコノミスト 二六〇—五

東亞民族主義に就いて(東亞民族論二)

福岡日日新聞 一月一日

租税と生活安定(民族と經濟 一〇) 財 政 三ノ二
 増税のもう一つの意義(民族と經濟 一〇) 財 政 三ノ八
 昭和十四年

東亞民族の形成(東亞民族論 五) 經 濟 論 叢 覧ノ一
 貨幣的利子論の吟味(新利子論研究 四) 經 濟 論 叢 覧ノ二
 政府支出と所得増加(新利子論研究 五) 經 濟 論 叢 覧ノ三
 絕對價格の問題(新利子論研究 一〇) 經 濟 論 叢 覧ノ四
 貨幣の非中立性(新利子論研究 一一) 經 濟 論 叢 覧ノ五
 貨幣の中立性に就いて(新利子論研究 一二) 經 濟 論 叢 覧ノ六
 完全予見の問題(新利子論研究 一三) 經 濟 論 叢 覧ノ一
 利子動感説について(新利子論研究 一七) 經 濟 論 叢 覧ノ二
 新利子論序説 經 濟 論 叢 覧ノ三
 利率決定者としての銀行 經 濟 論 叢 覧ノ四
 勢力抽象の勞銀論 經 濟 論 叢 覧ノ五
 波動の内在性(新利子論研究 七) 經 濟 論 叢 覧ノ六
 物價對策について(民族と經濟 七) 財 政 叢 覧ノ六
 戦時の消費節約について(民族と經濟 六) 商 工 經 濟 七ノ一
 勢力に於ける存在拘束性 日本諸學研究報告 第五篇
 東亞と民族原理(民族と經濟 一七) 改 造 三ノ二
 東亞主義と東亞文化(東亞民族論 七) 日 本 評 論 一四ノ二
 東亞の解放(民族と經濟 一五) 日 本 評 論 一四ノ九
 消費節約について(講演) 東亞建設下の日本經濟
 ケインズの貨幣的利子論 (朝日新聞社編) 經 濟 論 叢 覧ノ一
 エコノミスト 一七ノ一

高田保馬博士著書論文目錄

支那民族の問題(東亞民族論 九) 文 藝 春 秋 一七ノ三
 東亞民族の使命(東亞民族論 六) 福 岡 日 日 新 聞 一 月 一 日
 日本民族の目標(民族と經濟 一六) 福 岡 日 日 新 聞 三 月
 物價騰貴の問題(民族と經濟 八) 福 岡 日 日 新 聞 三 月
 昭和十五年
 波動内在性の分析(新利子論研究 八) 經 濟 論 叢 覧ノ一
 勢力としての價格(勢力説論集 二) 經 濟 論 叢 覧ノ二
 勢力加速度の法則(勢力論 六) 經 濟 論 叢 覧ノ三
 乗數の問題 經 濟 論 叢 覧ノ四
 限界生産力と勢力の問題(勢力説論集 四) 經 濟 論 叢 覧ノ五
 勢力抽象の經濟理論(勢力説論集 三) 經 濟 論 叢 覧ノ六
 民族主義と帝國主義(民族論 六) 經 濟 論 叢 覧ノ一
 經濟に於ける統制と體制(民族と經濟 第二集 五) 經 濟 論 叢 覧ノ三
 廣民族主義に就いて(民族論 七) 經 濟 論 叢 覧ノ四
 戦争の本質 經 濟 論 叢 覧ノ五
 經濟の統制に就いて 經 濟 論 叢 覧ノ六
 物價政策の歸結(民族と經濟 九) 經 濟 情 報 一五ノ一
 國民生活の計畫化(民族と經濟 第二集 三) 經 濟 情 報 一五ノ二
 日本經濟の現實分析(民族と經濟 第二集 一〇) 改 造 三ノ四
 勢力説(勢力説論集 一) 改 造 三ノ四
 低物價政策(民族と經濟 第二集 九、物價問題の再検討) 東京帝大經濟學部 第一號
 會編) 日下講演叢書 日本學術振興
 貧乏に就いて (石井氏還曆記念講演會講演集第六編)

經濟論理化の限界(民族と經濟第二集一四)

文藝春秋 二八ノ二

新體制の經濟論理

エコノミスト 八ノ七

民族と文化

日本社會學院年報 第七輯

國民生活について(民族の問題三)

東京蠶糸專門學校學報 五ノ一

國力の涵養(民族と經濟一四)

福岡日日新聞 一月

米價の長期變動(米穀經濟の研究(2)報告)

日本學術振興會前第六小委員會

昭和十六年

經濟學論の一節

經濟論叢 五ノ五

勢力經濟學序説

經濟論叢 五ノ二

生産の理論の一節

經濟論叢 五ノ六

價格論

國家學會雜誌 五ノ二

生産期間の問題

日本經濟學會年報 第一輯

社會學原理の前後

社會學年報 第八輯

勢力經濟學の日本性(講演)

日本諸學振興委員會研究報告 第九篇(第二回經濟學)

昭和十七年

長期國策について(民族と經濟第二集七)

現地報告(文藝春秋) 一

利子勢力説

經濟論叢 五ノ四

條件統制と需給統制

經濟論叢 五ノ六

乘數理論の問題(鬼頭教授の新著について)

經濟論叢 五ノ四

統制に於ける需給均衡

經濟學論集 三ノ七

ヒックス利子決定論の分析

經濟學論集 三ノ二

農業と人口(民族と經濟第二集八)

農業と經濟 九ノ一

經濟學展望

東亞民族の問題(民族と經濟第二集四)

日本諸學 一七ノ三

國土計畫について(講演)

國土計畫 一

統制經濟の進路(民族と經濟第二集六)

大阪學士會會報

廣民族論(民族と經濟第二集三)

福岡日日新聞 一月

東亞通貨の一斷面(民族と經濟第二集一一、文那の通貨と貿易)

日本學術振興會滿蒙支經濟第二特別委員會支那通貨特別分科會報告

昭和十八年

聯關財についての覺書

經濟論叢 五ノ一

利子論序説の一節

經濟論叢 五ノ三

利子を決定するもの

經濟論叢 五ノ四

利子に於ける勢力

經濟論叢 五ノ五

國家と經濟生活

經濟論叢 五ノ六

貨幣よりの干渉(利子率の決定に關して)

經濟論叢 五ノ一

統制經濟の述替

經濟論叢 五ノ二

統制經濟の諸概念

經濟論叢 五ノ四

需給統制の諸方法

經濟論叢 五ノ五

ヒックス利子理論について

經濟論叢 五ノ六

東亞民族の問題

公民講座 三三

時局と國民生活(民族と經濟第二集一二、時局と社會政策(2))

日本民族の方向(民族と經濟第二集二) 固本盛國 三月

Die Gemeinschaft als Typus: Zeitschrift für geminten Staatswissen-schaften, Bd. LXXX, 1927.

Der Weg zur Gesellschaft: Jahrbuch für Soziologie; Eine internationale Sammlung, Dritter Band, Herausgegeben von Prof. Gottfried Salomon; Frankfurt a. M., 1927.

On the Coefficients of Production: Kyoto University Economic Review, Vol. IV, No. 1, July, 1929.

A Power Theory of Wages: Kyoto University Economic Review, Vol. IV, No. 2, Dec., 1929.

Skizze einer Machttheorie des Preises: Annalen der Juristisch-literarischen Fakultät der Kyo-schu Kaiserliche Universität, 1928-1929.

On the Differential Birth-rate by Classes: Kyoto University Economic Review, Vol. VI, No. 2, Dec., 1931.

Macht und Wirtschaft: Kyoto University Economic Review, Vol. VII, No. 1, July, 1932.

Cyclical Variations and Progressive Changes: Kyoto University Economic Review, Vol. VII, No. 2, Dec., 1932.

Saving as the Costless Process: Kyoto University Economic Review, Vol. VIII, No. 2, Dec., 1933.

A Critical Analysis of Boehm-Bawerk's Theory of Capital: Kyoto University Economic Review, Vol. IX, No. 1, July, 1934.

Introductory Discourse on the Theory of Interest: Kyoto University Economic Review, Vol. X, No. 1, July, 1935.

An Analysis of Social Power: Kyoto University Economic Review, Vol. X, No. 2, Dec., 1935.

Eine dritte Geschichtsauffassung, Grundbegriffe der soziologischen

Geschichtsauffassung: Reine und angewandte Soziologie, Eine Festgabe für Ferdinand Toennies zu seinem achtzigsten Geburtstage am 26. Juli, 1935.

Die Rolle des Machtfaktors in der Zinstheorie: Zeitschrift für Nationalökonomie, Bd. VI, Hft. 5, Dez., 1935.

The Bankruptcy of Wage Theories; Prolegomena to a Power Theory of Economy: Kyoto University Economic Review, Vol. XI, No. 1, July, 1936.

Determination of the Rate of Interest: Kyoto University Economic Review, Vol. XII, No. 1, July, 1937.

Unemployment and Wages; A Critical Review of Mr. Keynes' Theory of Unemployment: Kyoto University Economic Review, Vol. XII, No. 2, Dec., 1937.

Kulturelle und Geistige Voraussetzungen für Japans Aufstieg: Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. XLVI, Hft. 1, Juli, 1937.

Money, the Economic Veil: Kyoto University Economic Review, Vol. XV, No. 4, Oct., 1940.

附記 論文目録の年次は掲載雑誌発行年次、論題下の括弧内は収録せられたる博士の著書名(ローマ数字は篇、和数字は章、アラビア数字は節)を示す。

尚、先生にはこの他に隨筆並に小時論等多數あるも本論文集の性質上それを省略させて載した。もとより脱漏謬誤なきを保し難く、茲に深く先生にお詫び申上ぐ次第である。

(金泰恒利編)